

飛騨高山

残したい

想いと風土



高山市
上宝町

堂殿神社 他 宮司
飛騨獵友会 上宝支部長

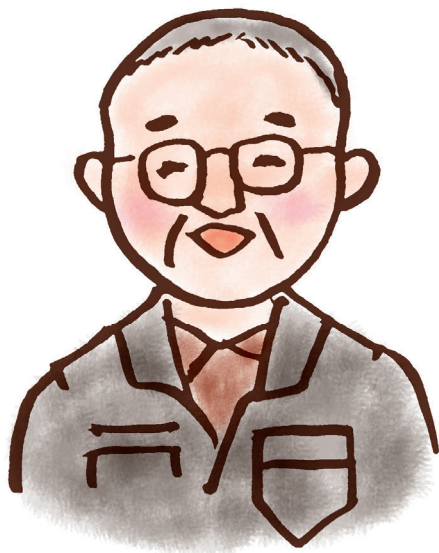
袖垣 そでがき 吉治 よしはる さん

地域の祭りと、獵友会

どちらにも言えるのは

続いていくためにはこだわらず

変化することが大事やな



宮司、獵師とって

高山市上宝町蔵柱に生まれ育った袖垣吉治さんは、複数の神社の宮司を務めながら、地元獵友会の支部長という顔も持っています。

100年続く子ども祭り

過疎化が進む中、小さな神社や祭りはどこも存続の課題を抱えています。

本郷地区(本郷、長倉、蔵柱)には、「子ども天神祭り」という子どもだけで行う祭りがあります。小学生から中学生で組織する「少年団」が運営し、大きい子が小さい子に伝えながら、明治から100年以上続いてきました。しかしコロナ禍で、この貴重な経験ができない年代も出てきています。

主役は子どもたち

「子ども天神祭り」
学問の神様・菅原道真公に
勉強が出来ますようにと
願いを込めます。



計画から踊りや囃子の稽古まで、すべて大きい子が中心となって進めます。



大人は一切口を出さず、見守ります。



4月3日。5月にある例祭にさきがけて子どもたちの祭りが集落に春を告げます。

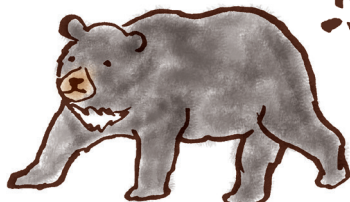


鹿 ニホンジカ

飛騨北部では少なかったのが、近年北上してきました。さまざまな農作物や、木の芽や皮も食べてしまいます。

獣と共存するために

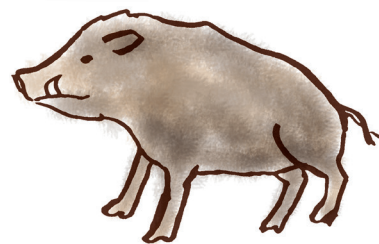
狩猟の対象となる代表的な動物です。
ジビエ料理への利用など
命を無駄にしない努力もしています。



熊 ツキノワグマ

農作物への被害のほか、人里に出没して危険を及ぼすことも。

猪 ニホンイノシシ



イモなどの農作物を荒らします。
豚熱が流行すると猟友会でワクチン散布作業も請け負います。

狩猟の昔と今

昔は野生動物の利用がさかんで、猟師にあこがれる人が沢山いました。

熊の「胆嚢(たんのう)」は漢方薬の原料として高価で売買され、毛皮も人気があったため、熊一頭が百万円もの稼ぎになった時代もありました。

現在では狩猟の主な目的は、自然界のバランスを維持しながら人や農作物への被害を防ぐ「害獣駆除」に移り変わりました。

猿や猪に農作物を荒らされたり、熊が人里に出没して危険な場合などに要請を受けて出動します。

しかし駆除の現場では、民家や道路では発砲できないという法律に阻まれて苦労することもあります。

猟銃だけでなく「電気止め刺し」という規制にかからない道具を取り入れ、工夫しながら活動しています。

次世代への伝承

駆除に報奨金が出る仕組みや、免許取得に対する補助などもあり、上宝では2つの猟友会が存続していますが、狩猟に携わる人は減少しています。

肉や毛皮の需要が減り、仕留めた獣を土に埋めることも増えてしまいましたが、正しく処理すれば、熊や猪は美味しく食べられます。

解体する機会があれば若い人を呼び、教えながら一緒に作業したあとは肉を持ち帰って食べてもらうなど、知識を伝えていくことを大切にしています。

いま、
伝えたいこと



(文・絵 大森貴絵 高山市)

少子高齢化が急激に進んだら、神社や祭りを維持していくことも、猟友会が活動していくことも、だんだん難しくなってきたのが現実なんやさ。

どちらにも言えることは、若い人の負担になるようなやり方をしとっては、続いていかんということや。

昔のやり方を押しつけるんでなく、柔軟に無理のない方法で継承していけるよう、相談しとるところやよ。